

# ホームレス少女

## 宝物

春日信彦

## 中洲の怪事件

9月23日（日）午前11時15分、福岡市中洲にある西大橋の西側土手で、黄土色の麻袋に包まれたグレイのジャケットを着た男の死体が発見された。ボタンで閉じられた左内ポケットには牛本皮の黒い財布が入っていた。財布には運転免許証、明治神宮のお守りが1つ、VISAクレジットカード&キャッシュカード1枚、一万円札2枚、千円札4枚、百円玉2枚、十円玉5枚、一円玉7枚、が入っていた。運転免許証の記載から、氏名は佐藤秀雄、住所は東京都練馬区下石神井5丁目7-3 JGAマンション707、生年月日は昭和41年9月5日、年齢46歳と判明。

検死の結果、左後背から突入した銃弾は心臓を貫通し、肋骨二本を粉砕していた。死体は一週間前後経過したものと推断された。身長は169センチ、髪は肩まで伸びており、顔は強度の打撲により形状は不明瞭。服装は汚れた半袖の下着、LLサイズのグレイのジャケット、綿生地の水色トランクスパンツ、ウエスト96センチの紺色のゴルフズボン、穴の開いた黒の靴下を着用。その他、身体上において、手足の爪が伸びており、黒い垢がすべての指の爪に見られた。

第一発見者は川端商店街で定食屋を営む志村八郎、41歳。彼は認知症である。水上公園で橋のふもとを眺めている彼を中洲交番の坂上巡査が発見し、声をかけたところ、彼は麻袋を指差し「あれは何だろう？」と巡査に尋ねた。そこで、巡査は不審に思い中洲交番に連絡し、同僚の萩本巡査と共に麻袋を引き上げ、その中を確認した。志村八郎は徘徊の途中、午前11時ころ水上公園を訪れ発見したものと思われる。

死因は背後からの銃弾によるものであるが、銃弾は体内に残っていなかった。至近距離からの射殺と判断されたが、下着シャツの左背部には弾丸が貫通したと見られる穴の弾痕が見られたが、ジャケットの左背部にはその弾痕が見られなかった。したがって、ジャケットは拳銃による射殺後に何者かによって着せられたものと推察された。殺害されたと見られる佐藤秀雄は暴力団の組員で、12年前に麻薬取締法違反で検挙されていた。

9月26日(水)午後6時10分、福岡市川端町にある冷泉公園のブルーシートテント内で18歳前後と思われる女性の扼殺死体が発見された。第一発見者はこの公園に住む川村幸平、58歳男性。調書によると被害者は、身長は156センチ、頭は坊主に近いスポーツ刈り、服装は長袖の紺のポロシャツ、破れたチャコールグレイのウィンドブレーカー、破れたネイビーの靴下、下着は男性用長袖シャツ、綿のダークグレイのトランクスを着用、靴は薄汚れたスニーカーを履いていた。

彼女はホームレスと見られ身元はまったく判明しなかった。この公園に住む三人のホームレスは、昨日、25日(火)の夕方、そのテントに二人の男がいたのを目撃したと証言した。彼らは死亡した女性を男性と思っていたと考えられる。二人の人物は昨年5月ころからこの公園に現れ、住みつくようになったと付け加えた。一方の所在の分からない男性は50歳前後の年配ということで、二人は親子ではないかと三人はうわさしていたとのことだ。ここ最近、親子喧嘩する声が夜中に聞こえたときさらに付け加えた。

前者の射殺の加害者は暴力団の組員で、後者の扼殺の加害者は同居のホームレス男と、それぞれの加害者は別人と考え、福岡県警の捜査は進められた。だが、捜査はまったく進展していない。前者においては被害者が東京の暴力団の組員であること、後者においては被害者の身元を割り出す手がかりがまったく無いこと、さらに、同居していたホームレス男を特定する材料がまったく無いことであった。三人のホームレスは同居していた男の顔をはっきりと思い出すことができなかった。似顔絵を書くこともできなかった。

### 逃げてきた男と少女

コロンダ君は書斎の机で頬杖を着き笑顔を作っていた。警視庁勤務の後輩から入手した中洲の怪事件をぼんやりと考えていた。この事件を小説の材料としてドラマのイメージを膨らませていた。そこにいつものようにお菊さんがお茶を運んで書斎に入ってきた。鶴が描かれた輪島塗のお盆を丸テーブルにおくと「坊ちゃん！」と声をかけた。にやけた顔を見たお菊さんはコロンダ君の心を読んでいた。

「ダメですよ、坊ちゃん。小説のことばかり考えていては。考えるんだったら、麻薬マフィアを叩きのめす、いい方法でも考えてくださいな」お菊さんは坊ちゃんの横顔をじっと見つめた。振り向いたコロнда君はスッと立ち上がり、テーブルに腰かけると眼を丸くして話し始めた。「お菊さん、今度の話はチョーおもしろいよ。小説になること間違いなしだよ」コロнда君は話し終わるとお茶をすすった。

お菊さんはいつものように奇妙な話を聞かされると思い少し興奮した。心ではコロнда君の話を楽しみにしていた。身を乗り出したお菊さんはコロнда君のドヤ顔を見つめた。「今度はどんな話です。早く話してくださいよ。創価学会の殺人事件ですか？それとも、総理大臣の不倫騒動ですか？」お菊さんは眼を輝かせてコロнда君をせかした。一呼吸置いたコロнда君は腕を組んで話しはじめた。

「殺人事件だけどもね、これが奇妙なんだよ。福岡市中洲で起きた殺人事件だけど、ひとつは暴力団員の射殺で、もうひとつはホームレス少女の扼殺なんだよ。まず、暴力団員の射殺だけど、特に理解できない点が二つあるんだ。一つは、弾丸は胸を貫通しているのにジャケットに弾痕が無いこと、もうひとつは、すべての指に黒い垢があったこと、なんだ」コロダ君はまず暴力団員の射殺の疑問点を話した。

眼を輝かせて聞いていたお菊さんは目じりを下げて興奮が冷めた表情をした。「詰まんない話ですね、何が不思議ですか？ピストルで撃った後にジャケットを着せたんでしょ、黒い垢は無精者だったんでしょよ」期待していたほどの話ではないことにがっかりした。「いや、不思議じゃないか。いったい、何のために、ジャケットに着せ替えたんだろう？そのジャケットの内ポケットには運転免許証が入った財布が入っていたんだ。いくら無精でも、すべての爪に黒い垢が溜まるだろうか？」コロダ君はそのことをここ数日考えていた。

キョロキョロと大きな眼を左右に動かしたお菊さんはあごを小さく引くように頷いた。「そういわれれば、なんとなく不自然ですね。暴力団員って意外とこぎれいに行っているように思えますよね。指に垢が溜まっているのは変ですね。内ポケットのない服を着ていたから、財布を入れるために内ポケットのあるジャケットに着せ替えたんじゃないかしら。あ、そうよ、運転免許証が発見されるように、あえて、細工したんじゃないかしら。身元がすぐに分かるように」お菊さんはひらめきをドヤ顔で話した。

コロンダ君は二度頷いた。「確かに、運転免許証からすぐに身元が割れたんだ。東京の暴力団員で、麻薬取締法違反の前科があった。つまり、警察に身元を教えたかったわけだよ。そして、加害者も暴力団員であることも。だけど、犯人が暴力団員であれば、犯人探しは難航するんだよ。捜査しても無駄だ、とでも犯人は言いたかったのだろうか？事実、まったく捜査は進展していないということだよ」コロンダ君の考えもまったく進展していなかった。

今回ばかりはお菊さんの妄想も難航していた。「爪の垢なんですけど、考えれば考えるほど不思議ですわね。坊ちゃん、爪に垢が溜まったことおありですか？」失礼とは思ったが、小さな声で訊ねた。「無いよ。子供のころ泥んこ遊びをやったときは、爪に泥が溜まったけどね。冗談でも、暴力団が泥んこ遊びをしていた、とも思えないしね」コロンダ君は両手の手のひらを上に向けた。

お菊さんは思い出したように両手をぽんと叩いた。「被害者が東京の暴力団ということは、東京から逃げてきたのかしら？ところが、彼は追ってきた暴力団に発見され射殺された。なぜ、東京から中洲まで逃げてきたのか？これが分かれば事件は見えてくるんじゃないかしら、坊ちゃん」お菊さんの妄想がさえてきた。コロンダ君もお菊さんの妄想に賛成した。

「僕もそうじゃないかと思っていたんだ。逃げてきたんだよ。そして、追ってきた暴力団に殺された。いったい、なぜ、逃げてきたのか？これは、永遠に謎かもしれないよ。警察も捜査が行き詰まっていて、お手上げ状態だから」お菊さんの眼は血走ってきた。妄想がフル回転し始めた。

「ところで、扼殺されたホームレスの少女と射殺された暴力団員は関係があるんじゃないかしら。二人は一緒に東京から逃げてきたんじゃないかしらね。きっとそうよ、二人は追ってきた暴力団に殺されたに違いないわよ」お菊さんの妄想は真実味を帯びてきた。

警察はまったく別の事件として捜査しているが、お菊さんが言うように二つの事件は同一犯の仕業のように思えてきた。「ホームレスの少女と暴力団がどう結びつくのか？あ、分かった、一年半ほど前から、冷泉公園に二人のホームレスが住みついたらしいんだよ。この二人というのが射殺された暴力団員と扼殺された少女じゃないだろうか？お菊さん」お菊さんも眼を丸くして大きく頷いた。

「だとすれば、なぜ、服を着せ替えたのか？爪に黒い垢があるのか？二つの疑問が解けますね。射殺された暴力団員はホームレスだった。男と少女は何らかの理由があつて、一年半前に東京から逃げてきた。身を隠すために二人はホームレスとなったが、とうとう、追ってきた暴力団員に見つかり男は射殺され、そして少女は扼殺された」お菊さんは事実を話すように落ち着いた声でゆっくりと話した。コロンダ君もこれが事実ではないかとふと思った。

「男と女が逃げるといえば、駆け落ちが浮かぶんだけど、暴力団員が逃げるとなれば、お金の持ち逃げじゃないですかね。だから、追ってきた暴力団は執拗に探し出して殺したんですよ」お菊さんは納得したように頷いた。「だけど、ちょっと気になることがあるんだ。男が射殺されたのが9月15日前後で、少女が扼殺されたのが9月25日なんだよ。なぜ、同時に殺さなかったんだろうね。拳銃で脅してお金のありかを白状させたならば、二人とも同時に殺すと思うんだが、お菊さん」コロンダ君は自分を納得させることができなかった。

「そうですね。事件を混乱させるためじゃないですか。でも、これも妄想ですからね。まったく事件の解決にはつながりませんよ。そう、男と少女はどんな関係ですかね？親子ですか？」お菊さんは少女に興味をわいてきた。「男は46歳で婚姻歴はないんだ。だからといって、親子で無いともいえないよな。ここだけの話だけど、この男、ちょっとは名の知れた大学の法学部を卒業していてね、卒業後、大手の不動産会社に3年ほど勤めていたんだ。何がきっかけで暴力団員になったんだろうね」コロンダ君は首をかしげた。

「暴力団にもエリートがいるんですね。でも、親は嘆いているでしょうに」お菊さんはあきれた顔でお茶をすすった。「妄想の話に戻るけど、持ち逃げしたお金は追ってきた犯人が持っていったんだろうか？射殺された男は白状したんだろうか？」コロンダ君はお金のことが気になった。

「白状していますよ、殺してしまえば、お金のありかが分からなくなるじゃないですか、坊ちゃん」あまりにも愚かな質問にあきれた顔で答えた。「そうだよな～、白状したから、殺されたんだよな。かわいそうだよな、扼殺された少女。男が持ち逃げしたお金は、きっと麻薬売買の汚いお金に決まっているよ、暴力団はこのお金でまた麻薬売買をやるんだろうな」コロダ君は暴力団の争いに巻き込まれた少女が哀れに思えてきた。

ホームレスになり、しかも扼殺された少女のことを思うと人生の不条理にムカつきを感じた。一度、コロダ君は少女の遺体が見つかった冷泉公園に弔いに行くことにした。

### 短くても幸せな人生

福岡市中洲にある“福博であい橋”では路上ライブをする若者たちがいる。その一人に志村夕紀という中洲高校定時制一年の女子高生がいた。彼女は中洲では有名な定食屋の“八ちゃん食堂”の看板娘だ。有名なのは定食が飛びつきりおいしいからではなく、亭主の志村八郎が認知症だからである。2年ほど前にアルツハイマー型認知症が発病し、それ以後、彼は、中洲、天神界限を徘徊するようになった。交番のおまわりさんとはお友達になっている。

彼女は食堂の定休日の火曜日に、福博であい橋にやってきては、ギターを弾きながら歌っている。このであい橋で歌っていると色々な人が足を止めて耳を傾けてくれる。中には拍手をしてお祝儀までする人物もいる。あるとき、ホームレスの少年が千円札にお守りを包んで彼女に祝儀を渡した。だが、9月まではよく聞きに来てくれたホームレス少年の姿が、10月以降見られなくなった。彼女はお守りを首にかけ、一流のシンガーソングライターになるのを夢見て頑張っている。

11月11日(日)コロнда君は扼殺された少女の弔いに福岡市中洲にやってきた。少女の遺体が発見された冷泉公園を訪れ、花束を捧げると、川端商店街で聞き込みを始めることにした。というのは、ホームレスの二人が商店街によく来て、食べ物をもらっていたという聞き込みを得たからだ。これはあくまでもコロнда君の少女への弔いで、聞き込みをしたからといって事件の解決につながるとは思っていなかった。

最初にパン屋からあたることにした。コロнда君はなんと言って訊ねればいいのか迷ったが、とりあえずお店に入ることにした。硝子ドアを手前に引き開けると、香ばしい香りを漂わせたいろいろなパンが陳列棚に並んでいた。セルフでトレイにできた手のパンを取り、入口右横のレジで会計するようになっていた。入口左の窓際には白い丸テーブルがあり、食事も取れるようになっていた。甘党のコロンダ君はシナモンドーナツをピンクのトレイに取り、レジでキリマンのコーヒーを注文し、547円の会計を済ませ、窓際の白い丸テーブルに腰かけた。

しばらくすると香ばしい香りのキリマンのコーヒーが運ばれてきた。中学生と思われる花柄のエプロンをかけたショートヘアの少女が、少し緊張した面持ちでゆっくりとコーヒーカップをトレイの上に置いた。少し笑顔を見せた彼女だったが、すぐに緊張した面持ちになり立ち去ろうとした。コロнда君はこの子なら何でも話してくれそうな気になり声をかけた。「あの、ちょっと訊ねたいことがあるんですが」コロнда君は少女を呼び止めた。

少女は振り向くと嬉しそうに笑顔を作り返事した。「何でしょうか？ここにはいろんな種類のパンがございます。すべて手作りで、日本一の味と自負しています。何か他にご賞味なされませんか？」少女はここぞとばかりにパンの自慢をした。コロンダ君は気まぎれになってピザパンを注文した。「ピザパンを頂きます、それと、ちょっとお聞きしたいんですが、時々、商店街にホームレスの親子がやってくるとうわさを聞いたのですが、本当ですか？」

少女は予想もしなかった質問にしばらく黙っていたが、笑顔を作って返事した。「はい、以前は時々やってきました。最近姿が見えませんが、そう、八ちゃん食堂のご主人が残り物をよくあげていましたよ」コロンダ君は大きな手がかりをつかんだと心の中で喜んだ。はやる気持ちを抑えて少女に訊ねた。「八ちゃん食堂に行きたいんですが、この商店街にありますか？」

少女は明るい声で返事した。「はい、すぐそこです、案内します。同級生のお店です」少女は奥に引っ込むとしばらくして戻ってきた。コロнда君はテイクアウトすることにして、包んでもらったピザパンを手提げ袋に入れてもらった。早速二人は表に出ると、少女は右方向に歩き出した。10件ほど通り過ぎると“八ちゃん食堂”の看板が左手に見えた。「ここです」少女は指差すとガラガラと開き戸を開けて中に入っていった。

「いらっしやい、みなみちゃん」明るい少女の声がした。「夕紀さん、お客さんよ、この方がホームレス親子についてお聞きしたいんだって」みなみはコロнда君を紹介した。怪訝な顔をした夕紀はコロнда君をテーブルに案内した。「どんなことでしょうか？あの親子は時々やってきましたが、最近は来なくなってしまいました。何かあったんですか？」夕紀はコロнда君を刑事と思った。

顔を赤くしたコロダ君は気まずくなって頭を掻きながら話しはじめた。「いや、僕は刑事じゃありません。何か親子についてご存知だったらお聞きしたいと思って伺っただけです。ここのご主人が親しくされていたとか？」コロダ君は主人に話を聞きたかった。「父は今いません、それに、父は認知症なので話を聞かれても参考にならないと思います」夕紀は期待にこたえられないことを伝えた。

ガラガラと開き戸が開くと少年が入ってきた。「お帰りなさい」みなみは同級生の五郎に声をかけた。五郎の後に認知症の八郎が入ってきた。八郎は「いらっしゃい」と挨拶すると奥に入って行った。「五郎君、この方がホームレス親子のことを聞きたいんだって、何か知ってる？」みどりは五郎を引き止めるように声をかけた。「いや、あの親子とは口も聞いたことが無いよ」五郎はそっけなく答えた。

夕紀はコロンダ君をじっと観察していた。「お客さんは本当に刑事じゃないんですね」夕紀はコロンダ君を見つめると念を押すように訊ねた。疑われていることに気づいたコロンダ君は背筋を伸ばし丁寧に答えた。「はい、刑事ではありません、信じてください」コロンダ君は極秘の話が聞けるような予感がした。夕紀はしばらく黙っていたが、信用して話すことにした。突っ立っているみなもと五郎に椅子に座るように声をかけると、夕紀はコロンダ君の正面に腰かけた。

「実は、あの少年は、少女なんです」夕紀はコロンダ君に打ち明けた。みなもと五郎はあっけにと取られた顔で、みなみが疑うように言った。「え、マジ！女なの？」みなみは夕紀の顔を覗き込んだ。夕紀は頷くと話しはじめた。「であい橋で歌っていたとき、いつもは、少し離れた橋の袂で、一人で聞いているんだけど、あの時は親子で聞いていたの。そして、歌い終わると、ホームレスの少年が駆け足で近寄ってきて、お守りを包んだ千円のお祝儀をくれたの。ホームレスって匂うじゃない。でも、くさい匂いじゃなくて、女の匂いがしたの！びっくりしちゃった」夕紀は驚きを顔に表し、みなみに顔を向けた。

「やはりそうでしたか。少女の遺体が発見されてからは、ホームレス親子の姿が見られなくなったと聞きました。ホームレスの少年は実は扼殺された少女だったのですね。いったい誰が、あんなむごいことをしたんだ。かわいそうに」コロンダ君は顔を両手で覆った。それを見た夕紀は小さな声で声をかけた。「お客さんは少女のことを知っていらっしゃるんですか？」夕紀は少女の身元を知りたかった。

両手を顔から外すと誤解された自分に気づき即座に答えた。「いえ、知り合いではありません。少女が扼殺されたことに憤りを感じただけです。夕紀さんは少女について何かご存知なんですか？」コロンダ君は夕紀が何か隠しているように思えた。夕紀はしばらく黙っていた。夕紀は首にかけていたお守りを取り外し、テーブルの上に置き話しはじめた。「このお守りはホームレスの少女にもらった物です」夕紀は赤いお守りをじっと見つめた。五郎、みなみ、コロンダ君の三人もお守りに目を向けた。

「では、このお守りがホームレス少女の形見ということですね」コロンダ君は両手を合わせ、お守りを拝んだ。そして、そっとお守りを左の手の平に載せ右手の人差し指でお守りの真ん中を押した。「お守りの中に何か入っていますね。中を見られましたか？」コロンダ君は夕紀の顔を覗いた。夕紀は突然の質問に固まってしまったが、小さな声で返事した。「いいえ」夕紀は顔を横に小さく振った。

夕紀はお守りを千円に包んで渡してくれた優しい少女の笑顔を今でもはっきりと憶えていた。このお守りを身に着けるとなぜか勇気がわいてくるのだった。「中を見てみましょうか？夕紀さん」コロンダ君は夕紀の返事を待った。夕紀はしばらく目を閉じていたが、ゆっくり頷いた。コロンダ君は赤いお守り袋の口を開けると、中には折りたたんだ小さな手紙が入っていた。そっと取り出し、それを広げると、かわいい小さな文字でびっしり書かれてあった。コロンダ君は目を凝らしてゆっくりと読み上げた。

～ 夕紀ちゃんへ ～

今、朋美は天国にいます（たぶん）。夕紀ちゃん、いつも明るい歌声ありがとう。これからも、ずっと、ずっと、歌い続けてね。夕紀ちゃんの歌を楽しみにしているファンがたくさんいるよ。本当は、手紙ではなく、友達になって、いろんなことを直に話したかったんだけど、朋美はホームレスだし、無理みたいだった。朋美には、自分のことを話す友達がひとりもいなかった。だけど、夕紀ちゃんには話したいの。

朋美はいつも二人で徘徊していたよね。おそらく、みんなは親子と思っていたと思う。そして、朋美を少年と思っていたと思う。これは、二人で考えた偽装なの。殺し屋から身を守るための。実を言うと、みんなが思っている、お父さんは、朋美の彼氏なの。父親ほど年の離れた彼なの。ヒデは麻薬を売買していたやくざなの。本当に、悪人よね。でも、朋美にとっては愛する彼だったの。

朋美は中洲で生まれ、育ち、15歳で家出をしたの。上野駅でふらふらしていたとき、ヒデにナンパされて、成り行きで同棲したの。一人でいると淋しかったし、お金がほしかったし、割り切って同棲しちゃった。でも、ヒデがやくざだと分かったときはとても怖かった。やくざといえば、刺青をして大きな声で怒鳴るやつと思っていたけど、ヒデは刺青もしてないし、柔らかい口調で、とても優しくかったの。

なんとなく、サラリーマンのようで、毎朝、スーツを着て、「行って来ます」と元気よくマンションを出て行っていたわ。どこに、毎日行っていたかは、分からないけど。毎月、お小遣いをくれるし、休みの日は、ドライブや食事に連れて行ってくれたの。知らないうちに、ヒデをマジ愛してしまった。ヒデも朋美をマジの彼女として扱っていたみたい。朋美はこんな生活がずっと続くといいなと思っていたの。ところが、ヒデはやくざなのに、とんでもないことをしでかしたの。

麻薬売買の1億円を持ち逃げしたの。当然、つかまれば殺されると分かっているながら。ヒデは朋美をつれて、タクシーを20回以上乗り替えながら、中洲に逃げてきたの。冷泉公園についたとき、ヒデは朋美に言ったの。「一緒にいたら、殺される。これをもって、どこか遠くに逃げろ」って。札束を包んだ袋を押し付けて、朋美の肩を叩いたわ。

「俺は、しばらく、ホームレスになる。やつらは、いずれ、福岡にもやってくるはずだ。まさか、俺がホームレスになっているとは思えない。いい考えだろう。早くここから逃げろ、朋美の顔はやつらには割れてない、早く逃げろ」すべては、計画通りうまく行く、とヒデは朋美に言い聞かせていたみたい。

朋美は袋を抱えて公園を飛び出し、あるところに駆けて行ったわ。そして、そこに袋を隠したの。もう、夕暮れだった、コンビニで食べ物を買って、冷泉公園に駆け足で戻ったわ。ヒデは冷泉公園のベンチでこれからのことを考えていたみたい。朋美が突然顔を見せると、驚いた顔で「さっさと、逃げないか、一緒にいるところを人に見られたら、やばいぞ」と言って、朋美を突き飛ばしたの。朋美は決心していたの。ヒデと一緒に暮らすことを。そして、一緒に殺されることを。

「逃げない、ヒデと一緒にホームレスになる」と大きな声で叫んだわ。ヒデはぽかんとした顔で「馬鹿なことを言わず、さっさと消えろ、バカ」とヒデは立ち去ろうとしたの。朋美は必死になって脚にしがみつき「絶対、離れない、離すもんか、お願い」朋美は泣きながらお願いしたの。あきれたヒデは朋美を抱き起こすと、何も言わず頷いて、涙を拭いてくれたわ。その日は、天神を二人で散策して、ホテルに泊まったわ。

夕紀ちゃんは馬鹿な朋美と思うかもしれないけれど、ヒデとの人生は後悔していない。短くても幸せな人生だった。しかも、ホームレスになったおかげで、優しい八郎さんと元気をくれた夕紀ちゃんに出会えたしね。最高の人生だったわ。特に、世の中には八郎さんのような心が美しく優しい人を知っただけでも幸せでした。お礼をしたかったけど、ホームレスにできることといえば、夕紀ちゃんに拍手をすることぐらいでした。

ついに、天国に行くときが来た、と9月に分かったとき、御礼の気持ちとして、朋美の宝物を隠した“秘密の場所”を八郎さんに教えました。八郎さん、夕紀ちゃん、ありがとう、さようなら。天国から夕紀ちゃんを応援しています。

手紙を読み終えたコロンド君は、顔を上げると「ホームレスの少女は、朋美というんだね。かわいそうに」とつぶやいた。夕紀はあまりにも衝撃的な告白にどっと涙を流した。みなみがハンカチを夕紀に手渡すと、みなみまでも涙を流した。「夕紀ちゃん、みなみちゃん、朋美さんは、後悔なんかしてないんだ、幸せだったんだよ。そお、朋美さんは八郎さんに秘密の場所を教えたみたいだね」コロンド君は暗い空気を払拭しようとした。

夕紀はハンカチを目元に当て「父は覚えているかしら？秘密の場所、認知症だからすぐに忘れちゃうのよ」と八郎の記憶障害を話した。そして、ハンカチをみなみに返すと五郎の顔を覗き込んだ。五郎も眉を下げて「きっと忘れてるよ、教えるんだったら、夕紀ね～に教えりゃよかったのに。親父に確かめてみるか、無駄とは思うけど」五郎はスッと立ち上がると、二階に上がる階段に向かった。

八郎は丸いちゃぶ台にS Lの雑誌を広げじっと眺めていた。五郎は父親の前に座ると大きく深呼吸をした。認知症の八郎は五郎の言うことに少しは反応するが、他人にはまったくといっていいほど反応せず、とぼけた顔をする。五郎は八郎の後ろに回り、ゆっくりと肩を揉んだ。八郎の心を落ち着かせると、ゆっくり質問した。「父ちゃん、ホームレスの兄ちゃんと二人で行ったところ、憶えているかい？」五郎は何か返事が帰ってくるのをじっと待った。

八郎にはまったく反応が無かった。一言も話さなかった。八郎を動かすものは過去のイメージと感情のみであった。突然現れる過去、たとえば、小学校の記憶が起床のときに現れると、“ランドセルはどこだ”、“遅刻する”、など子供の頭に戻ってしまうことがある。一ヶ月以上ホームレス親子はやってきていないが、今日は“とんかつ”をあげよう、とか言って玄関にぼんやり突っ立っていることがある。

コロнда君はがっかりした二人を気遣って「いつか、突然、思い出すことがあるよ、せかさず、いつかまた、訊ねてみてはどうか、五郎君」と慰めた。二人は頷き笑顔を取り戻した。すでに、腕時計は4時半を回っていた。帰るしぐさをすると三人は中洲川端駅まで送ると席を立ったが、ちょっとぶらぶらして帰ると言って見送りを断った。

“八ちゃん食堂”を出たコロнда君は、一人商店街を駅に向かって歩いていると、朋美の言葉がよみがえってきた。“短くても幸せな人生だった”斜光に浮かぶ眼を閉じた朋美の幻が一瞬脳裏に現れると、今まで抑えていた涙がどつとあふれ出た。

## ホームレス少女

<http://p.booklog.jp/book/61401>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61401>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61401>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ